佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園初等学校 校長　佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）、・ワシントン補習授業校を経て、現職。

心のハードル

◆ 交流の場面で

啓明学園は、近くの横田基地内にあるアメリカの学校との交流を続けています。2学期に5年生が横田メンデル小学校を訪問し、2月にはアメリカの子どもたちを啓明に迎えて、交流の日をもちました。

啓明学園には、英語が話せる子がたくさんいますし、メンデル小学校には、日本語ができる子が少なくありません。それでも、子どもたちの様子を見ていると、話す力を持っていることと、実際にコミュニケーションができることとは必ずしも同じではないことがよく分かります。英語の時間にはよく話していても、このようなときはなかなか口を開かない子がいます。言葉を口に出すには、それなりの心の準備や勇気をもって、越えなければならないハードルがあるようです。反対に、「ハロー」「サンキュー」ぐらいしか言えなくても、身振り手振りや表情で友達をひきつけてしまう子もいます。こんな子は、言葉よりも先に心のハードルを越える力を身につけているのでしょう。小学校で英語を教える場合には、そのことの方が、単語や言い回しをたくさん覚えることより大切かもしれません。

ひな人形

このハードルを持っているのは、日本の子に限ったことではありません。以前、横田の学校に行ったとき、啓明に体験入学したことのある日本語の上手な子に会ったことがありますが、彼女はアメリカの友達の前では日本語を話そうとしませんでした。ところが、啓明に来たアメリカの子の中には、日本語はほとんど話せないのに、空手のまねなどをして積極的に日本の子に近づき、親しんでいる子がいました。

もし、日本の子がアメリカの友達のだれかに、英語で話しかけて、一つでも何かを伝えることができたら、その楽しさが、実感となって心に残るでしょう。仮に一言も話せなくても「このつぎは」と、具体的な目標ができ、外国語を学ぶ意欲もわくにちがいありません。心のハードルを越える力をつけるためにも子どもたち同士の直接の交流にはたいへん大きな意味があります。

◆外国人の先生の目から

先日、主に帰国生を教えているイギリス人の先生が、「最近やっと先生として認められてきたようです。」という感想をもらしていました。彼女はもう5年も啓明で教えているので、彼女が自分たちの学校の先生であることはみんなが知っているはずなのに、直接授業で教えていない子どもたちからは、なんとなくよそよそしい態度をとられることが多かったと言います。特に、英語で話しかけると、腰が引けてしまう子が少なくなかったそうです。英語の授業は1年生からやっているので、帰国生でなくても、挨拶ぐらいはだれでもできるはずなのですが、いざ外国人の前に出ると気持ちが負けてしまうようなのです。それが、最近になって、やっと自然に反応してくれるようになったと言うのです。

啓明学園では、このところ、毎年30人以上が海外から編入し、約340人の児童のうち、帰国生が100人を超えました。帰国生は、英語で生活してきた子が多いので、高学年では、英語で生活しても不自由しない児童がどのクラスにも3分の1ぐらいいることになります。英語を話す人が少数派とは言えないような